Nagano Prefectural Museum of History

長野県立歴史館たより

2016年 夏号 vol.87

特集

夏季企画展

夢をのせた信州の鉄道 ―失われた鉄路の軌跡―

金子常光　草津軽便鉄道沿線鳥瞰図（大正末～昭和初期、草軽交通株式会社蔵）

デキ 12 形電気機関車（草軽交通株式会社蔵）

信越本線碓氷第 3 隧道と ED4222（当館蔵）

木曽森林鉄道　駅におけるタブレット交換（個人蔵）

県民の皆様に必要とされ、愛される歴史館をめざして

館長　笹　本　正　治

本年4月1日から長野県立歴史館の館長となりました笹本正治と申します。これまで信州大学人文学部で教鞭を執って、戦国時代や災害などを研究してきたものです。これから皆様に必要とされ、愛される歴史館を目指して、職員一同心を合わせて前進していきたいと思います。

本来、歴史学は人類がよりよい未来を構築していくために必須の学問です。私たちの未来は過去と現在の向こうに造られます。過去と現在のしっかりした分析なしに未来を築くことはできないはずです。社会では地方創生が声高に叫ばれています。この背後には限界集落、シャッター通りに象徴される地方の衰退があり、長野県はそうした最前線だともいえます。過去を直視し、こうなったのはなぜかを知り、それを踏まえて長野県の未来の計画を立てる必要があります。でも、長野県内の地方創生に歴史館およびその関係者はどれだけ関わっているでしょうか。私たちの社会的な訴えの少なさがこのような事態を招いていると思います。

歴史館はその活動の割にまだまだ認知度が低く、県民の皆様に身近に感じてもらっておりません。歴史館の大きな使命は、県民が必要とする歴史資料（県民の宝物）を収集し、保存し、研究し、その成果を展示という形で公開し、未来をつくる子供たちの教育のためにも生かしていくことだ、と私は考えております。

そのためにも、まずは職員たちと、そして皆様と歴史館のあるべき姿を確認し、10年後、20年後にどうなっていればよいか論議し、将来計画を作っていきたいものです。

長野県においては「信州学」が教育の中で大きな位置を占めるようになりつつあります。その中で信州の歴史は大きな素材です。しかし、私は信州学とは単に信州（長野県）を素材にして勉強することではないと考えます。「学」と称するのですから、これまでにない新たな学問を展望したいものです。足下にある自分たちのふるさと信州をじっくり確認し、地域から日本、世界を見据え、ふるさとに愛着を持ち、ふるさとの役に立ちたいと思うような人を育てたいものです。

『信濃史料』の基礎をつくった栗岩英治は、草鞋（わらじ）史学（草鞋を履いてどこまでも歩いて現地を見る歴史学）の学者として知られます。ふるさとを学ぶには現地で実際に土地を踏みながら考えることが大事です。そこから従来の枠組みにとらわれない、新たな視点が生まれてくることを期待します。信州学が全国のモデルになる地域教育となるためには、「信州学」とは何かもじっくり検討しなくてはなりません。これもまた、県立歴史館が考えていくべき課題の一つだと思います。

いずれにしろ「長野県立歴史館」ですから、県民の宝物となるべき歴史資料を収集し、その研究成果などをわかりやすく発信するようにいたします。私たちの館がよりよくなり、県民の皆様にとって必要なものとなるよう、ご指導ご協力をお願いいたします。

長野県の遺跡発掘2016

会期・場所　平成28年３月12日(土)～６月26日(日)　長野県立歴史館
７月９日(土)～８月21日(日)　長野県伊那文化会館（伊那市）
９月３日(土)～10月16日(日)　安曇野市豊科郷土博物館
10月29日(土)～11月13日(日)　佐久市近代美術館

今回の企画展では、長野県埋蔵文化財センターと県内市町村教育委員会が長野県内で近年発掘調査を行った遺跡や、報告書が刊行された遺跡の紹介に加え、「土偶」をテーマにした展示も行っています。

長野県埋蔵文化財センターの調査成果から

栄村のひんご遺跡の調査は、栄村ではじめての本格的な発掘調査となりました。

調査区内からは縄文時代後期（約3,500年前）の竪穴住居跡や敷石住居跡20軒や粘土採掘坑などが発見されました。また多くの縄文土器や石器、さらに顔・腕・脚などの各部位に壊された状態の土偶が８点出土しました。出土した土偶の中には顔がハート形に表現され、鼻の下が顔全体の半分以上もあるユニークな表情を持つものもありました。

ひんご遺跡の調査風景
（長野県埋蔵文化財センター提供）

県内市町村教育委員会の調査成果から

出土したガラス小玉をつなげたもの
（長野市教育委員会提供）

長野市長野女子高校校庭遺跡の調査では、弥生時代後期（約1,800年前）の竪穴住居跡26軒などが発見されました。弥生時代後期の竪穴住居跡からは265点以上ものガラス小玉がみつかりました。また出土した多くの弥生土器の中に、北陸系土器が少なくとも21点含まれ、そのうち４点ほどが富山県で作られ当地に持ち込まれた土器であることがわかりました。当地の弥生時代から古墳時代にかけての貴重な成果が多く得られました。

～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～

今年は佐久市近代美術館でも展示を行います。県内各地における最新の発掘成果を、ぜひご覧ください。

≪関連行事≫
【伊那会場】
７月16日(土)・30日(土)　展示解説デー
８月20日(土)　伊那文こどもまつり
歴史体験教室
【安曇野会場】
９月10日(土)　茂原信生氏講演会
10月１日(土)　遺跡報告会
※詳細はホームページをご覧いただくか、当館までお問い合せください。

夏季企画展

夢をのせた信州の鉄道

― 失われた鉄路の軌跡 ―

北陸新幹線の延伸やリニア中央新幹線計画により、新たな高速鉄道網に対する県民の期待が高まっています。明治・大正時代、近代化をめざす日本と地域の夢を担ったのが鉄道でした。今回の展示では、急峻な山やまが連なる信州に日本の大動脈を築いた人々の苦闘、生糸や木材輸送ルートの拡大と県内産業の発展、時間短縮で身近になった有名社寺や温泉地への観光客の流入など、鉄道が運んできた活力あふれる近代信州の動きを、写真や鳥瞰図などで紹介します。

ドイツ製アプト式ラックレール（碓氷峠鉄道文化むら蔵）

山岳地帯の難工事に挑む

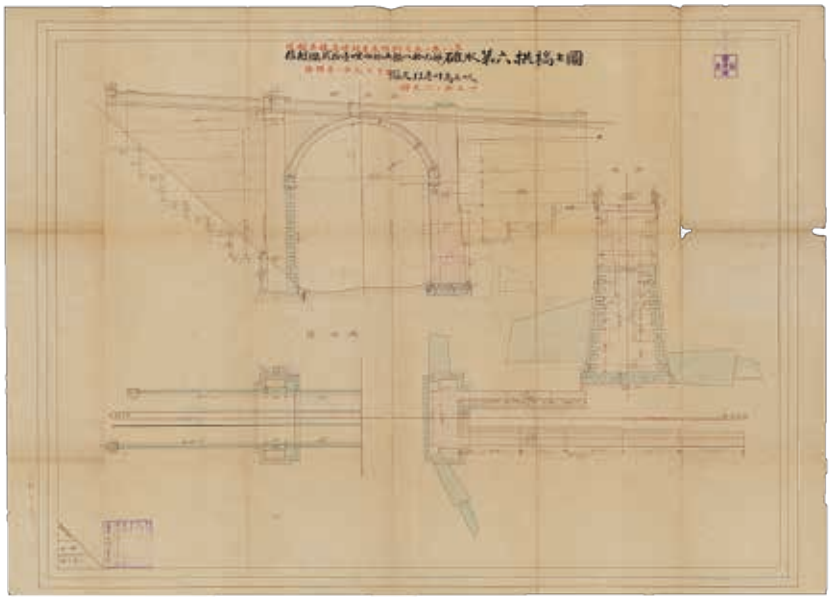
1869年（明治２）、政府は東京-京都を結ぶ幹線鉄道建設を決め、その後、中山道ルートが候補となりました。しかし、勾配66.7‰（1,000m間で66.7mの高低差）の碓氷峠が立ちはだかり、横川－軽井沢間の工事に着手できませんでした。

1891年（明治24）、鉄道庁はこの急勾配を克服するため、26本のトンネル（延べ4,460m）と、18本の橋梁（延べ450m）建設という難工事に挑みました。さらに、ドイツ山岳鉄道を手本にしたアプト式ラックレールを導入し、1893年（明治26）、横川-軽井沢間開通にこぎつけました。

蚕糸業とともに広がる鉄道網

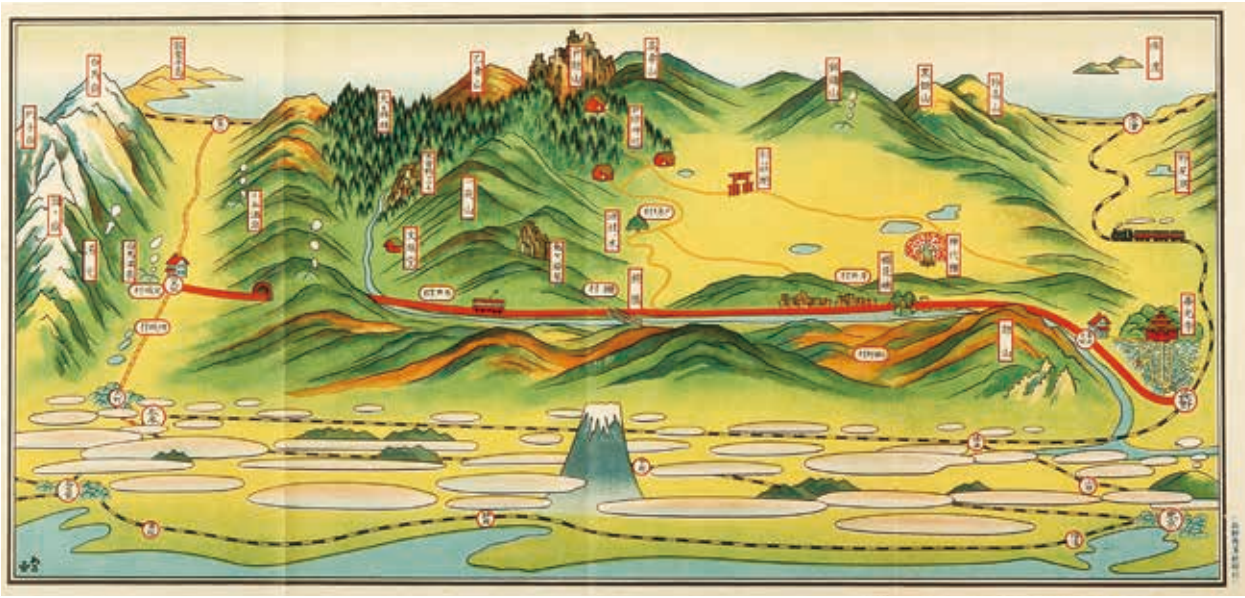
製糸業が盛んだった諏訪・岡谷地域では、いち早く生糸を輸出するため、和田峠越えで信越線に最も近い場所に地元とともに駅設置を請願し、1896年（明治29）大屋駅が開設されました。

大正時代には、蚕糸業が発展した上田・丸子地域、須坂地域、松本地域などで、原材料・燃料や製品の輸送、あるいは工員の足として丸子電鉄、上田温泉電軌、長野電鉄、筑摩電気鉄道などの私鉄網が広がっていきました。



碓氷峠第六拱橋之図（安中市教育委員会蔵・写真提供）

草軽電鉄で活躍したデキ12形
電気機関車
（草軽交通株式会社蔵・写真提供）



善光寺白馬電鉄予定路線鳥瞰図（善光寺白馬電鉄株式会社蔵）

あこがれの高原列車

信越線は工業製品の物流だけでなく、善光寺への参詣客急増をもたらしました。布引観音と布引鉄道のように、各地の私鉄は、社寺と都市を結ぶ参詣鉄道としても盛行しました。また、温泉・保養地と結ぶ路線も多く、筑摩電気鉄道の浅間線、善光寺白馬電鉄、上田温泉電軌青木線などがあげられます。長野電鉄湯田中線や上田電鉄別所線は、現在でも都市と温泉・参詣地を結んでいます。

首都圏の人々を草津温泉へ誘（いざな）う目的で敷設された草軽鉄道は、温泉地への誘客だけでなく、沿線の別荘地・観光地開発、数々の映画への登場によってイメージアップが図られ、あこがれの高原列車となっていきました。

人の流れは新たな商売や名物を生みました。「駅弁」は、鉄道開通とともに全国各地ではじまりました。信越線の横川駅では、高崎間が開通した1885年（明治18）に「おむすび」販売をはじめ、名物「峠の釜めし」へと発展しました。

深山幽谷をゆく森林鉄道

県内では、市街地の鉄道網よりも早く森林鉄道が敷設されました。特に、木曽地域では、中央線の開通に合わせ、河川を使った「木曽式伐木運材法」から、鉄道による輸送に転換しました。1901年（明治34）、まず、阿寺御料林内に人力や畜力で木材を運ぶ軌道が敷かれました。1915年（大正４）には、小川線で蒸気機関車を用いた森林鉄道が開通し、木曽郡内の山深く軌道が延びていきました。

昭和時代には、木材運搬だけでなく地元住民の足となり親しまれてきました。

失われた鉄路に見る夢

鉄道の高速化、戦争や不況、道路網の整備と自動車の発達で、いくつかの鉄路が廃止されました。

近年、失われた鉄路や鉄道遺構を、近代化を支えた歴史をふりかえる文化財や産業遺産として、あるいは観光資源として、新たな活用を計る動きが生まれています。

単線の木曽森林鉄道で衝突を防ぐため、通行を許可するタブレットを渡す（個人蔵）

研究の窓

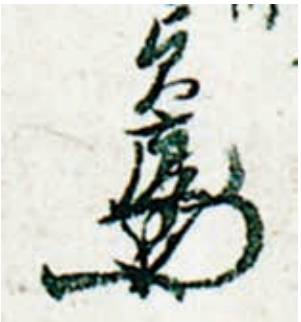
小笠原貞慶の「花押」

―「天正壬午の乱」から―

天正10（1582）年３月武田勝頼、６月織田信長がそれぞれ自害。信濃国を支配した二人の大名がこの年に没したことで、信濃は上杉・北条・徳川ら各大名による国分の戦争、言わば「草刈り場」。干支にちなみこの争乱を「天正壬午の乱」と呼んでいます。

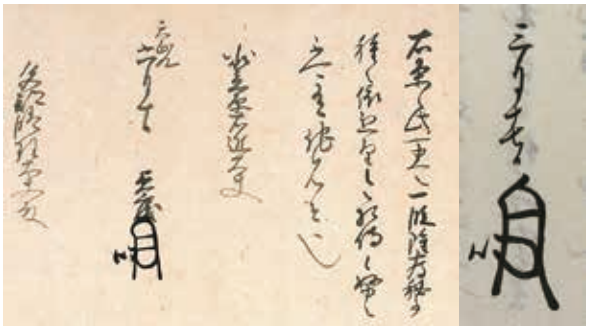
武田晴信に信濃を追われた小笠原長時はこの時会津に潜み信濃帰国をあきらめていませんでした。今回はその息子貞慶の数奇な運命についてみてみましょう。

天文19（1550）年の武田晴信の筑摩郡攻略にともない、喜三郎（のちの貞慶）は父長時など家族とともに流浪生活に入り、越後国長尾景虎、続いて摂津国三好長慶のもとに身を寄せます。永禄４（1561）年、将軍足利義輝は長時一族の信濃帰国を助けるよう長尾景虎に命令します。さらに無事帰国できるように本山寺（高槻市）へ祈祷を依頼する書状を父子で送ります。このときの花押がAです（左写真）。喜三郎は元服し「貞虎」を名乗っています。この実名は景虎の一字をもらったのでしょう。確認できる貞慶の最も古い花押です。その後、長時・貞慶父子は越後国長尾景虎のもとへ向かいます。さらに貞慶は父とは別行動をとり、織田信長の家臣となって東国大名の使者となります。信長と武田勝頼との緊張関係が増すと、信長の命令で小山・田村・佐竹氏などへ織田方への帰属を求める使者となり武田包囲網を形成することを呼びかけます。貞慶は田村家臣冬室氏に生活儀礼の故実を伝授する書を送っています（青山文書）。この時の花押はAと同じですが、実名は貞慶に変えています。三好長慶からの一字拝領と考えられます。



A型花押（本山寺蔵　高槻市しろあと歴史館提供）

いっぽう長時は、天正６年上杉家の跡目争いで景虎方に付き一方の当事者である景勝と対立しました（御館の乱）。景虎が破れると長時は会津蘆名氏のもとへ逃れました。翌天正７年から８年にかけ、貞慶は会津を訪れ長時から家督を継承します。その直後の貞慶の文書を分析すると、それまで使用してきた花押を大きく変えていることに気づきます。最も早いものは天正９年５月22日の旧臣善勝坊に宛てた「信長の助力により信濃復帰できれば、本領を安堵する」と約束したものです。ついで同年６月10日に上杉景勝の家臣色部長実へ幕、法螺貝、日取の作法など小笠原流故実を伝授した書の花押（B型）です。Bは武家様と呼ばれるもので、一見すると武田氏や北条氏のものに似ています。佐藤進一氏は、花押の形は敵将のものを採り入れることで相手の権威をも簒奪する効果もあると指摘します。いずれにしても貞慶は家督を継承し花押を大きく改変しました。



B型花押（左　小笠原貞慶幕張伝授状
右　信陽玉証鑑ともに当館蔵）

天正10年３月武田氏が滅亡すると貞慶の信濃復帰が現実味を帯びます。貞慶は二木・松木・小宮山・耳塚ら筑摩・安曇郡旧臣に対し所領安堵状を出します。花押はＢ型です。しかし貞慶の思いとは裏腹に筑摩・安曇郡を支配したのは木曽義昌でした。貞慶復帰を期待した旧臣たちは散り散りになります。

C型花押（天正10年７月19日
三村勘兵衛宛　当館蔵）

ところが本能寺の変で信長が没すると貞慶は旧臣の支援を得て自力で深志城を奪取します。貞慶は６月12日までに花押をC型に変えています。これは旧領復帰に対する貞慶の決意を示す政治的意志表明だったのでしょう。

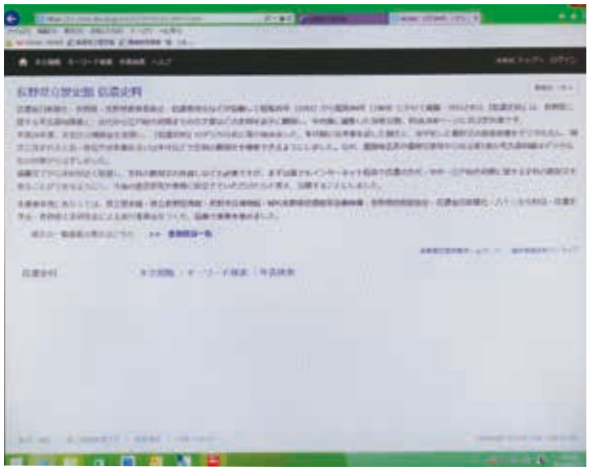
ライフステージのなかで画期となるとき花押を変えることで、大名は様々な意志を表明したことに気づきます。　（村石　正行）

文献史料をよむ

『信濃史料』データベースの紹介

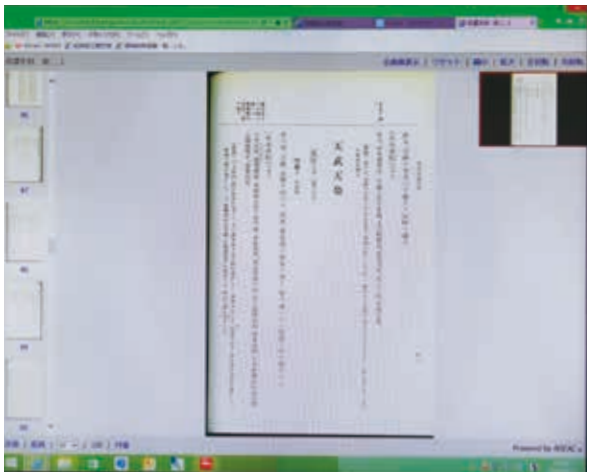
当館のホームページに

というメニューがあります。これは、『信濃史料』という書籍のデータを検索するためのデータベースです。試しにそのメニューをクリックしてみてください。



検 索 画 面

写真のような画面があらわれ、「本文閲覧」「キーワード検索」「年表検索」の３つの選択肢が示されます。知りたい史料の年月日がわかっている場合は「本文閲覧」を、知りたい言葉（人名・地名や出来事あるいは年代など）が含まれている史料を検索したい場合は「キーワード検索」を、検索結果を年表形式で表示したい場合は「年表検索」を選んでください。そこから知りたい史料を選ぶと、このような『信濃史料』の本文が表示されます。



検索結果の画面の例

ところで、みなさんはこの『信濃史料』をご存じですか。おそらく初めて耳にした方が多いのではないかと思います。この本は、長野県の歴史に関する古文書などの史料を、活字に直して年月日順に並べた史料集です。出典とともに、その史料が示す内容を簡単に要約した「綱文（こうぶん）」と呼ばれる解説文を付してあります。内容は、長野県内の遺跡の所在地や考古資料の図面なども含まれていますが、ほとんどは奈良時代から江戸時代初期までの古文書などの史料を活字に翻刻（ほんこく）したもので、30巻32冊、約18,000ページに及ぶ史料集です。

この膨大な史料集作成の準備は、戦前の昭和４年（1929）にまでさかのぼります。栗岩英治という飯山出身の郷土史家を中心に、多くの方が関わり準備が行われました。日中戦争・太平洋戦争による中断や栗岩氏の死去など困難な状況もありましたが、信濃毎日新聞社・長野県・長野県教育委員会・信濃教育会などが事業を再開し、昭和26年（1951）から昭和44年（1969）にかけて編纂（へんさん）・刊行されたもので、これをもとに『長野県史』が編纂されました。

編纂完了から半世紀近く経過し、史料の年代や翻刻文の見直しなども必要で、それをふまえた新たな史料集の編纂が望まれますが、まずは誰でもインターネット経由で信濃の古代・中世～江戸時代初期に関する史料の翻刻文を見ることができるようにし、今後の歴史研究や教育に役立てたいと考え、公開することにしました。

なお、これは平成26年度に文化庁の補助金を活用した「地域と共働した信濃史料・善光寺関係史料データベース等構築・公開事業」による成果です。県立歴史館が事務局となり、関係機関・団体と実行委員会をつくり、協働で事業を進めました。

多くの皆さんの利用をお願いします。

INFORMATION
インフォメーション

■2016年（平成28）
6月～8月の行事予定

6月
休館日
6･13
20･27

春季企画展

長野県の遺跡発掘2016

3/12㈯～6/26㈰

●巡回展1　南信会場
伊那文化会館
7/9㈯～8/21㈰

●巡回展2　中信会場
安曇野市豊科郷土博物館
9/3㈯～10/16㈰

講座・イベント

古文書講座
初級第１回
A　6月５日㈰
B　6月16日㈭
中級第１回
A　6月４日㈯
B　6月16日㈭
上級
第２回　6月25日㈯

歴史館ふるさと講座in千曲
第１回：6月4日㈯
場所：戸倉創造館
時間：13時30分～15時
第２回：6月10日㈮
場所：戸倉創造館
時間：19時～20時30分
第３回：6月17日㈮
第４回：6月24日㈮
第５回：7月１日㈮
場所：あんずホール
時間：19時～20時30分

7月
休館日
4･11
19･25

夏季企画展

夢をのせた信州の鉄道
－失われた鉄路の軌跡－

7/9㈯～8/28㈰

■講演会
7/30㈯ 13時30分～
「信州の山と鉄道」
講師　小西純一氏
（信州大学名誉教授）

■講　座
8/11（木･祝日）13時30分～
講師：当館職員

長野電鉄温泉案内（当館）

考古学講座
第１回　7月16日㈯
13時30分～15時

古文書講座
初級第２回
A　7月３日㈰
B　7月21日㈭
中級第２回
A　7月２日㈯
B　7月21日㈭
上級
第３回　7月23日㈯

8月
休館日
1･8
15･22
29･30

歴史館で夏休み
8月6日㈯・8月7日㈰
10時～15時

歴史館セミナー
8月13日㈯
13時30分～15時

古文書講座
上　級
第４回　8月27日㈯

やさしい信濃の歴史講座
上田会場（信濃国分寺資料館）
8月27日㈯
13時30分～15時

表紙の写真の解説

金子常光 作《草津軽便鉄道沿線鳥瞰図》
（大正末～昭和初期、絹本着色、草軽交通株式会社 蔵）

新軽井沢と草津を結んでいた草津軽便鉄道（後の草軽電気鉄道）の路線沿線を描いた横長の絵図。作者の金子常光は、大正末から昭和戦前期に活躍した鳥瞰図を専門とする画家。作成年代は不明だが画中に描かれる「地蔵川」駅は、昭和２年に「北軽井沢」駅と改称されることから、それ以前の作である。

行事アルバム

＊＊＊＊ 春季企画展講演会から ＊＊＊＊

4月23日㈯当館講堂にて企画展「長野県の遺跡発掘2016」遺跡報告会・講演会を開催しました。長野県考古学会会員三上徹也氏から「土偶って何だろう？」と題してご講演いただきました。考古学の研究方法を駆使して、土偶製作の基本や精製土偶や粗製土偶の性格の違いなど、土偶論を語っていただきました。

＊＊＊＊ 歴史館でこどもの日 ＊＊＊＊

石のアクセサリーづくり

縄文人になって遊ぼう

5月４日・５日、天気に恵まれ、約500名の皆様にご参加いただきました。バックヤード探検、石のアクセサリーつくり、縄文人体験など、複数のイベントを楽しむ子どもたち・ご家族の皆様の姿がありました。

長野県立歴史館たより　夏号　vol.87
2016年（平成28）６月１日発行

編集・発行　長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6　電話026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail：rekishikan@pref.nagano.lg.jp　ホームページ：http://www.npmh.net/

印刷　奥山印刷工業(株)